

子どもの社会

勝部 真長

今日の演題は「子どもの社会」ということになっておりますが、むしろ「子どものふるさと」といった方が適当かと思われ
ます。

今日我々が考えなければならないことは子どものふるさとをどこに見出すか、我々はどういうふうにそれを用意してやった
らよいかということ です。それらがないとせつなわけはバーソナ
リティー形成の基礎は「家庭」と「ふるさと」にあると思うか
らです。うさぎや小ブナをおいまわすふるさとが、縮小され都
会化されて川がにごってしまっているような今日の社会では、
子どもが「ふるさと」を思いおこすことがむずかしくなってい
まっています。「ふるさと」を形成するのは自然環境だけでな
く社会環境もあり、下町では三社様のお祭りや夜店などという

情緒があり、それがなつかしい思い出になっています。しかし
近頃のようにマスコミによる刺激ばかり受けていると、何か落
ち着いてひとつのものを伸ばすことができないように思えるの
です。そこで、家庭や幼稚園の役割こそ、「たましいのふるさ
とになるものを提供すること」なのではないかと思うのです。
近頃の児童白書などで我国の子ども達の問題がいろいろ指摘さ
れています。非行少年をみると彼らは善悪の原則でなく
快、不快の原則だけで生活しているようです。かれらにはいい
ことかわるいいことかは解っていない。「気持がよい」とか「おも
しろい」とか「スリルがある」とか「とくである」からという
快、不快の原則で生活しています。これは幼児期において快、
不快の原則で生活している子どもを善悪の原則に移行させるこ

とができなかったためではないでしょうか。おとなはさしあたっての損得よりも長い間に得だからという考えで生活しています。子どもは快、不快の当面の感情で動いていますが、「賞罰」「社会的承認、不承認」などの事柄を通じて善悪の原則を学んでいきます。幼児のしつけの意味は快、不快から入り善悪の觀念に導くものだと思います。

では「道徳」とは何でしょうか。辞書には「人のふみ行なうべき正しい道である」と書いてありますが、私は「自然の欲望、衝動をコントロールできる」、これが道徳性ということの第一条件であると思います。しつけの中には「自分の欲望にブレーキをかけることができる」というのが入っています。あるお母さんは「どこからがわがままでどこからがわがままではないのかわからない」とおっしゃいました。社会に住んでいる以上、自然の衝動、欲望を満足させるのに一定の手続きがいります。ですから、社会に承認されているやり方で欲望を満足させるなら、わがままではないと思うのです。水をのむにしても、本来は器についてのむのむのです。単なるどの渴きをいやすにも細かな手続きがいります。それが文化というものです。「のどがかわいた」という生理的刺激と「それをいやす」という反応との間にいくつもの媒介を置くのです。我々が小さい時に一番早く教えられるのがテーブルマナーですが、食べたいという欲

望をみたくプロセスとしていろいろの「クッション」をおくこと、それが動物とちがう「人間らしさ」といわれるものなのです。そしてそれを学んでいくのが「しつけ」というものであると思います。ある先生の家で近所の人がいっしょにすもうの取組をテレビでみていたのですが、その家の子どもが帰って来て急にチャンネルをまわしてしまいました。近所の人達はその家のしつけを批判して、新教育のやり方はまちがっているといいました。たしかに、この子どもの行動は衝動的で人間らしさがみとめられませんね。一言でもよいから「ことわり」というクッションをおけば衝動的でなくなるのですが、この「衝動にブレーキをかける」という訓練が日常なされていないとその行動が出てこないのです。

「ふるさと」は心がホッとするところ、心のより所、情緒の安定性をもたらすものです。家庭もまたそういう機能をもっています。最近では家庭もまたテレビや、やかましい奥さん、うるさくさわぐ子ども、などで父親にとってはホッとする場所ではなくなってしまうようです。これが家庭の危機といわれるものなのかもしれません。ホッとする場所が家庭の外に求められることは非行少年の原因ともなります。心のふるさとが用意されていないのが原因となるのです。

では「心のふるさと」が形造るものは何でしょうか。それが

「心情」(センチメント)といえるものだと思います。「情緒」は「一時的な心の経験」を言いますが、これに対し「心情」は「永続性のある心の状態」をいうのです。人間の道徳性を支えるものが心情で情緒は心の表面にある浅瀬のようなものでしょう。中さぎ波がたったり消えたりしています。おとなに比べると子どもほど情緒的であると言えます。人格というものが発達するに従って心の深みが出てきて永続性のある「心情」ができてきます。他人のつげ口などで愛情や友情がこわれてしまうのは、おとなとして未成熟であるといわれます。情緒的なものが心情的なものに深まっていく、それが成長であり、深い心情性の育成が心のふるさとなっていくのです。人があるショックをうけたりすると心の深みに心情性を形成し物の見方、態度の中にそれが出てきたりします。小さい子どもの場合は全体的な雰囲気の中で子どもの心情を養っていくという事が必要になってくるのではないのでしょうか。ある外国人はいっしょにのりあわせた団体客のどんちゃんさわぎをみて次のようにいいました。「日本人は本当の心の幸せを見失っているから表面的におかしくさわいだりしているのではないか」と。「日本人は表面的波立ちとしての情緒の面では楽しそうに見えるが、心の深み、心のふるさと、心がシーンとおちつくようなものをつかんでいないのではないか」というのです。心の奥底に本当の安ら

ぎがあれば表面的なものに心をうばわれぬものです。表面的なものにふりまわされ、そのみを追い求めているのは心の奥底に本当の幸せをつかんでいないからだと思います。そこで新興宗教や「幸福の手紙」がはびこったりするのもかもしれませんが、それは国民の中に本当の幸福感がつかめていない、心のふるさと、魂のふるさとがみだされていいためで、ただマスコミによる強い刺激を求め、それらでごまかしをやっているのです。

このような、日本のおかれている社会文化的現状はおとなにとっても子どもにとっても不幸です。子どもに心のふるさとを与えてやる必要は本当に大なるものがあります。子ども時代は可能性をひき出す時代ですから刺激も大切ですが、その他に心の拠り所となる辭けさを用意してやる必要があるのではないのでしょうか。

それからもう一つ、先ほど私は道徳性ということをもう一方からみると欲求と反応との間に「グッション」を、即ち「ゆとり」をおくことだと申しました。徳川時代にはお金はハダカでわたすことはしませんでした。紙につつんで、のしや水ひきをかけてもっていったのです。それをわずらわしいと福沢諭吉は慶応義塾で月謝袋を作ったそうですが、欲望はある程度つつむということが文化だと言えるようです。欲望をコントロールす

るのにどういふ手続きが必要かという点、そこに集団というものが入って来るのです。幼稚園でも欲望をみたすのに間隔をおき生活リズムをおいて心情を深める一手段とします。フランスのデュルケムは「子どもの道徳性に必要なことは時間を守って暮すことにある」といっています。二年生の時間に「時計のない国」という朗読をやったことがあるのですが、結局「時計に従った規則的な生活をした方が便利だ」という結論に達しました。時間にあわせた生活が身につけてくることは大切ですが、それを守り易くする工夫がなされねばなりません。守りにくければそれをかえてゆくといふ柔軟な集団生活の運営がなされなければならぬと思います。

もう一つ集団生活の中で知っておくべきことは人間の群居本能と孤居本能です。人間にはこの二つの本能があるのです。幼児は仲間を作ってもそれ自体が本当にたのしいのか、また自分がたのしく遊ぶために仲間が必要なのかよくわかりません。低学年の子どもは自己中心적입니다。しかしもう少し成長すると仲間のために自己の欲望をがまんするようになります。それが社会意識、集団意識が高まってくるという成長の段階なのです。しかし「幼児は利己的である」とはいいながらも利他的な要素もっているのです。実際の行動、遊びを通して自分だけではたのしくなれない、みんな共にいなければ楽しくないのだという

ことがわかってくるのです。心理学に「平野の不安^{アラビヤンシズ}」というのがあります。犬を広い場所に一匹でよくと不安になり物かげに逃げこみます。人間も同じで、物かげに入った方が安定性があるからなのです。何かにかこまれてると安定感があるのです。しかし幼児は一人で遊べます。それをむりやりに仲間の中に入れてしまうことは子どもの自主性を損うことになるのではないのでしょうか。日本人は集団の中にもぐりこもうという傾向が強いのですが、それだからこそ一人でがんばれるだけがんばらせてみせることもたいせつなのではないのでしょうか。人間は本来群居本能の方が強いのですから、一人になってもまた集団に帰ってゆくと思うのです。外国人は子どもを育てる場合、一人でほうっておくというしつけのしかたをやっています。これは人間が独立心を養うためです。我々日本人は特にこの孤居本能をたいせつにみまもってやること、そして群居本能と孤居本能のバランスをたもちつつ教育することがたいせつなのではないのでしょうか。

(お茶の水女子大学教授)

* * * * *